令和５年度第２回　校長「語らいサロン」

テーマ「今年度の重点取組について」

令和５年５月２０日（土）９：００～１０：００
参加者　６名

川中子　本日は、４月の保護者会全体会（第１回校長「語らいサロン」）でお話しさせていただいた、今年度の第三吾嬬小学校の重点取り組みについてのご質問やご意見をいただきたいと思います。

（４月に発表した内容の確認）

それでは、事前に寄せられていた質問についてお話しします。
- 今年度の取組はもう始まっているのですか？
- 学年が上がるにつれてどのように変化していくのですか？
- 重点取組の研究報告は定期にあるのでしょうか？
また、その結果が子どもたちの教育にそのまま反映されるのでしょうか？

これは１年生の保護者の方からの質問だったんですが、とってもよい質問で私も感動しました。

失敗こそが成功への近道

「今年度の取り組みはもう始まっているのですか」というのは、もちろん、始まってはいるのですが…。「学年が上がるにつれてどう変化していくのか」ということについても基本的に子供たちにつけさせたい力は一つ、主体的に生きるようにさせるということですので、やることは同じなんですが、発達段階に応じてやり方は変わってくる。６年生と１年生が同じことをやるわけではありません。ただ、自分で考えさせて、自分で決めさせて行動させる。そして、成功も失敗もありますが。でも、自分で考えて行動できるようになったら、「失敗」っていうのはないんですよね、実は。「失敗」こそが、成功への近道になる。成功してしまうと、あまり学ぶことがなかったりすることもあります。失敗したときにこそ学んで、じゃあ、次にどうしようと考える。今までの教育は、「失敗させない」っていう教育をしてきてしまった。子供たちになるべく失敗させない。そこに、ちょっと、落とし穴があったかなということがだんだんわかってきたかな。だから、１年生でも６年生でも失敗させながら、自分で考えさせる経験をさせたい。それから、「重点取り組みの定期的報告は定期的にあるのか」というのは、これは学校便りやホームページでも随時アップしていくつもりです。あと、**私が一番理想と考えているのは、毎回の土曜学校公開に来ていただいて、子供たちや授業の様子を見ていただいて「おー、変わってきたね！」と言っていただけること。**今年一年の最後の方に、４月頃はこうだったけど、何か変わってきたね！っというふうになったら、これは一番の報告になるかな。私たちが取り組みたいのは、紙の上で「こうなりました」というのではなく、「子供がこんな風になっています。これです。子供を見てください。」っていうのが一番かな、と。そういう姿を目指しています。だけど、この研究は、教員の、まず、意識改革が重要で、実際４月からここまでにどれだけ進んだかというと、うーん。まだ、ほとんど進んでいない状態でしょうか。ただ、みんなが（研究主題を）突きつけられているので、悩んではいます。その、「悩んでいる」という状態はもしかしたら、結構進んでいるのかもしれません。今まで、悩むことさえなかったので、悩み始めたというのは進んでいるのかもしれません。ただそれが、子供の指導にどう出ているかというとまだ出ていない。

主体性の育成が完成している学級もある

出ている人もいます。もう、完成してしまっている人もいます。もう、この短期間、一ヶ月くらいの間に、児童の主体性が育成されているクラスもあります。だから、先生によっては、これまでやってきたことと同じことをやっているだけですが、その先生は今までもずっとそういうスタイルでやってきている訳です。昨日もその話を聞いたんですが、もう完成していました。たった一ヶ月の間に。子供たちはもう主体的に動くようになって。感動的な話でした。「先生は、何をやったの?」って聞いたんです。すると、ちょっと考えて「ありがとう、って言いました。」と。素晴らしいことですよね。いつか皆さんにきちんとお伝えしたいと思いますが。子供が何かやってくれたときに「ありがとう」と言ったら、みんなが主体的になった。給食当番じゃない人が後片付けの手伝いをしたんだそうです。それで、「ありがとう。ねえ、みんな、これって当たり前のことじゃないよね。有り難いことだよね。」と言ったら、みんなが「ありがとう」「ありがとう」「ありがとう」って言い出したっていうんです。その後、何かあると「ありがとう！」っていう言葉が出るようになったそうです。「ありがとう」って言葉がでるっていうのは、すごく「安心できるクラス」なんですよ。

「安心していられる」クラス

子供は、安心して生活できるようになると。いろんな問題がある子も含めて、目立つ子も、引っ込み思案の子も、安心していられるようになって、何でもうまくいくようになります。当然、勉強も楽しくできるようになるから、学力も上がります。たった一ヶ月でその結果が出ているんです。そういうふうになっていくといいな、と思っています。

・宿題で漢字ドリルや計算ドリルをやっていたが、授業時間帯にそれらをこなすのか、はたまた、ドリルは廃止なのか。そもそもそういう概念が変わるのか。

もう一つ寄せていただいたのは、私たちもよく考えていかなければいけない視点ですが、宿題で出されていた漢字ドリルや計算ドリルは、宿題がなくなるという時どうなっていくのだろうか、というご質問です。これについては、先日「不親切教師のススメ」という本を書いた先生をお呼びして、話していただいたんですが、その先生がズバリ言っていました。「教えるのは学校の役目。ドリルをうちでやってきなさいというのは先生の仕事、怠慢です。教えるのは先生の役割。覚えるのは子供たちの役割。覚えるかどうかは自分が努力しなければいけない。しっかり教えることは教えて、後はそれぞれのやり方で覚える。だからドリルの宿題は出しません。やりたい子はやってくる。ドリルは学校で使うものなので、家に持って帰ってノートに練習して来る子はたくさんいます。」だから、基本的には授業で使って。それから、ミライシードっていうのがありますから、あれなんかは子供たちも自分でどんどん進めて使っていますから、子供たちが自分の必要に応じてやっていくのかな。一律に同じ、例えば、「この字を１０回書いてきなさい。」というのはもう本当にやめようと思っています。１０回書いた方がいい子もいるし、１回でいい子もいるし、１００回書かないとならない子もいる。だから一律に同じ課題をやらせるというのは、個に応じた学びにならない。子どもは自分の必要に応じてやってくるといい。例えば、今週の金曜日に漢字テストをやります。合格点は 90 点です。範囲はこれです。では、頑張ってください、と。それで自分なりのやり方で練習させてやる。そうすると、今まで先生が必死になって工夫して教えてきた時よりも、クラスの平均点が上がった、という実践が報告されています。子ども自身が学び始めた時の方が、絶対的に良くなるんですよ。この取組はうちの学校ではまだ実践されている先生がいないので、証明されていないのですが、やっている先生たちは軒並みその結果に驚いています。子どもが変わっていくのでびっくりした、と。今までどんなに頑張ってもここまでしか引き上げられなかったのに、子どもに任せ出したら、勝手に限界を超えていってしまった、と。そうなるといいな、と思います。

・受験生は従来の通知表が必要（特に都立中高一貫校）
必要な子にはスムーズに対応してあげてほしい。

後、受験についてなんですが、通知表の写しが必要だという話は、もちろん写しの必要な学校もありますが、通知表はそのものが公文書ではありませんので、公文書でないものが絶対必要ということはあり得ないですね。

Bさん　受験に必要、というのもあるんですが、塾で必要なんです。

川中子　そうか、それはまた別の話になりますね。ただ、受験に関して通知表がないことが不利になるということはないですね。入試をする側としてもそういうことはできませんので。都立中高なんかはそういうことはないですね。もちろん、必要な書類を作ることはできるので。学校では、そういう書類は別に作っていますので。１年間に一つ作っていますので、それを使って作ることはできます。

・１年生の複数担任制については、どのように取り組んでいますか？

それから、後、主体性の取組とは別の話題で、１年生の複数担任制について、という質問がありました。どのように取り組んでいますか、ってことなんですが。これは、今年度から東京都で特別に始まった施策で、先生方の働き方の問題を解消するためにエデュケーション・アシスタントというのが作られました。これは、低学年の、１、２、３年生の学年に一人、副担任をつけるという制度ですね。今年、本校は申し込みをして、墨田区２５校のうち、１７校が OK になり、１年生に副担任をつけることになりました。T 先生という方がつくことになりました。この方の主な業務は、「家庭への連絡文書や調査資料等の作成補助、提出物の処理。」つまり、提出物って、朝たくさん来るんですよ。保健の提出物とか大量に。それを先生たちは授業をやりながら、合間に確認しているんです。そういう、不可能なことをやっているので、そういうのを見てもらう人を配置したということです。それから、「教材の準備、学習、給食、清掃等の指導補助」先生と一緒に子どもたちの指導をやってもらうということ。それから、「学校行事の運営や、地域など外部連携に係る補助。保護者対応、電話対応、来客受付など」ですから､保護者とお話ししていただいたりということもできる。それから「子供の観察や対応。子どもに関する情報の共有。学年の打ち合わせへの出席など」っていうのが、東京都の示したものなんですけど。

（ここで、T先生の様子を映した動画を視聴）

エデュケーション・アシスタントさん以外にも支援員さんというのも教室には入っていて。っていう感じで、いろんな支援の方に入っていただいていますけど。エデュケーション・アシスタントは常駐で、週４日間の勤務なんですが。朝から夕方まで一緒にいてくださって、非常に助かってます。この質問をしてくださったのは、１年生の保護者の方なんですが、数年前に「複数担任制」という話をしたことがあったんです。今見てもらった I 先生のクラスに、Y 先生が入って一緒に３年１組の担任をやってもらったことがあったんですが、途中で隣のクラスの先生が退職されて、Y 先生がそちらの担任になったため消滅してしまいました。その複数担任制とは違う感じですが、１学年に副担任の先生が 1 人配置されています。

改めて、なぜ今「主体性」なのか？

えー、というところで、今日、この辺りで寄せられた質問はおしまいですが、最後に「なぜ、主体性なのか」という話をしたいのですが。学校にはいろいろな問題があり、学校教育にはいろんな課題がありますね。学力をつけなくてはならない、子供のやる気をどう引き出すか。生活指導上の問題というのもたくさんあって。特にこのコロナ禍を通して、非常に複雑になってきました。いじめの問題、不登校の問題。それから子供の自己肯定感が低いとか、リーダーになりたがらないという傾向も強くなっています。それから、子どもが自分が幸せだと感じられなくなっている。特別支援。そういうのが大きな問題になっています。それから、教員の働き方改革という意味でも問題があるんですが、こういうのが、**子供の主体性。今まで大人が子どもを一つの型にはめようとしたやってきたことを、子どもが自分で決めて行動するという、全く違う形に変えることによって、ここに今、上がっているような問題が、ガラッとひっくり返るのではないかと感じているんです。**自分の３０年以上の経験の中で、いろんな問題に一生懸命取り組んできたけれど、なぜあそこでクリアできなかったのかというのは、私が子供を自分の思っている通りにさせようとしていたからだったんじゃないか。子どもはよくなる存在。それを心から信じて、子どもがよくなるのを待って支えていける。子どもが「自分で決めていいの？」ということに気がついて、それならこうやりたいってなって行った時に、ここに上がっているような問題は一気に解決する可能性がある。今、取り組み始めた研究は、うまくいったら、三吾の子供たちは自分たちで歩いていけるようになりますし、それが結果的に先生たちの働き方も変えるし、結局そのことによって社会が変わっていく可能性がある。そう思うんですね。

中学で元に戻ってしまうようでは「失敗」

そうだ、さっきの質問の中にもう一つ抜けていたものがあって。小学校を卒業して中学校に行ったときに、中学校では違うやり方をしていたとしたら、それが無駄になってしまうのではないかという考えがあると思うんですが、**おそらくですね、本当に子どもたちが主体的に生きていけるようになったら、どの場面に行っても主体性を発揮して生きていけるはずなんです。**やらされている時は中学へ行ったら変わってしまうかもしれないけれど、子どもたちが自分で決定できるようになったら、中学の枠の中で自分はこうやっていくんだと自己決定できるはずなんです。もし、そうなっていなければ、（我々の取組が）失敗であるということです。さっき、このクラスは完成しているっていう話をしましたが、その先生のクラスで３年生だったときにできていたことが、４年生の他のクラスになったらそれができなくなってしまっているのを見てすごくがっかりしたと言ってました。でも、私はその先生のやり方は間違ってないと思っているので、「どうしたの？　前はやっていたのに。」って聞いてみたらいいんじゃないですか、って言ったんです。怒るんじゃなくて、聞いてみてくださいよって。もしかしたら、他の目が気になって、自分だけいい子しているみたいで何か言われるんじゃないかって。そこで必要になってくるのは、勇気の問題で、それでも自分の正しいと思うことを行動できるかの問題です。その、**勇気も、自ら学び、考え、行動する人になればもてるようになる**。中学校に行ったらどうなるかというのも、非常に大きな問題です。もちろん、中学校にも言って行かなければなりません。でも、教育全体がそっちの方へ向かっているのは間違いないので。三吾だけが何か特別なことをやっているわけではありませんので。そっちの方へ向かっているんですけど。

「みんなの学校」

で、大阪の方で木村泰子先生という方が初代校長を務めた大空小学校というのがあって、ここが今言ったような話を実際に実現した、そういう学校を作られたそうで。この学校のことがとても話題になって、映画が作られたそうです。「みんなの学校」という映画が作られて、2015 年くらいにロードショーになって、結構話題になったようなんですが、私はその頃は気がつかなくて。その後、その木村先生という方がいろんなところでいろんな発言をされているので、読むことがあって、私はその木村先生の発言に非常に感化されました。今、今年こういう取り組みを始めて、改めて木村先生の話を聞いて、本も読んでみたんですが、今回読んだのは「１０年後の子どもに必要な見えない学力の育て方」という本で。この先生はもう退職されていて、数年経っているんですが。この先生の、大空小学校っていうところでの実践が書かれているんですが、ああ正に（三吾の研究がうまくいくと）こういう学校になっていくんだな、というモデルのような学校です。

（ここで映画のプロモーション動画を視聴）

こんな感じの映画があったそうです。この記録映画は私も見たことがないので、ぜひ見てみたいなと。調べてみたら、どこで上映しているというのはないのですが、自主上映はできると。上映権を買って、うちの体育館でもできると。ただ、ちょっとお金がかかるんです。まあ、今日は、ちょうどＰＴＡ会長さんもいらっしゃるので、後で相談させていただければと！（笑）

でも、ぜひ、保護者はもちろんなんですが、子どもたちにもみてほしいなと思っています。みんなの学校とどこが違うだろう？　今映った子なんて、いくらでもいますよ！

この（大空小）学校はいじめゼロ、不登校ゼロで話題になったんですけど、さっき紹介した本の出だしに、この学校は学力も全国１位になる県を上回る成績を収めていたというんです。特別なスパルタ教育をしているというのと、全く正反対の学校なのに、学力調査の結果は非常に高い。何が違うのかというと、**子どもが安心して生活できている**というところです。**どの子がいても安心できる学校を作っている。子どもは自分が学びたいことを学ぶ。**いろんな取組をされたらしんですが、最終的に先生は（授業中）１０分以上喋ってはいけません、というふうにもしたそうです。先生は授業４５分のうち１０分だけしか喋らないようにしようというルールを決めたんだそうです。後は、子どもが自分たちで、勝手に進めていく。子どもはやることがわかると、興味を示して、これ面白そうって結構しっかりやるんですよね。好きなことだったら、誰でも集中してやるじゃないですか。ゲームが好きな子は何時間だってやってますよね。それが、勉強が好きになったら、自分からやるようになるのかな。だけど、これをやりなさい、とか、これを覚えなさい、とただ押し付けられたものには、たいていの子はやだと拒絶してしまう。この子供たちは、自分で選んで、これをやりたい。私は教科書をまずしっかり読みたい。僕は図書室で本で調べてくる。誰々さんに聞いてくる。いろんな方法が一つのことを学ぶにもあります。友達と一緒にやりたいっていう子もいる。わからないから先生に聞いてくるっていう子もいる。だから、先生はそういう子どもたちの間を回っていて、「大丈夫？何か手伝うことある？」って声かけていく。「大丈夫、先生、あっち行ってて！」とそういう感じなっている。その結果が、学力調査でも出ている。

でも、**子どもが本当に勉強するようになったら、上がるに決まっているんです。**先生たちは、子どもが本気で勉強しないから困っているんです。本気で勉強している子なんて本当に数人しかいません。それが、みんながおもしろーいって勉強し始めたら、学力が上がるに決まっている。それに今まで気が付かなかった。でも、この取組は、やっている人たちは何十年も前からやっていて。大学附属の研究校などでは、かなり取組が進んでいて、私も以前からぜんぜん先生が教えない学校があるというのは聞いたことがありました。子どもたちが、今日は何ページを開いてください、って自分たちで進めているような。先生は隣で見ていて、必要に応じてアドバイスする。そういう学校は日本でたくさんあるということで、どうしてそうなっていったのかを勉強して取り入れていきたいと思います。

それでは、今日ご参加いただいている皆様からのご意見・ご質問がありましたらお願いします。

Ｂさん　今、中１の娘が受験しまして、都立中高一貫校へ進学しました。学校外のことで申し訳ないんですが、塾で５年生から、九段だと４年生からの成績表が必要で。模試をすごくたくさんやるんですが、テストの点数だけでなく内申点を加味して。３段階の評価から換算式があって、模試の結果と併せて合否の可能性を判定するというのがあるんです。それはとても精度が高く、実際に娘が行った中高一貫校の絞った模試の順位表を見ても、ほぼ載っている子が進学されているんです。それを元に勉強をすすめていくので。特に女子は皆さん内申点がいいので、その１点が重要で、その１点のために学校で自分はどう努力したらいいか、もうちょっと体育をがんばってみようとか。方向性も自分で導けるんですよ。本当に一握りに必要なものなので、全部じゃないので申し訳ないんですが、そういう子がいるという情報だけ、お伝えしておきます。

川中子　私はもともと中学校の教員なので、入試っていうのは全員が経験しますから、中学校の教員はそういうことをしっかり考えています。内申点がどうなのか。実際内申点だけじゃなくて、学校のランクなんかもあったりして、私の行っている学校と、〇〇区の〇〇中学校は、同じ公立の中学校なのに、評定の意味が違うということもありました。この学校の５は、こっちの学校４に相当する、という扱いを受けるわけです。私立ではそういうことがよくありました。都立高校もどんどん改革が進んで、いわゆる進学校といわれている学校では、内申点はほとんど加味されませんでした。当日の試験の結果が重視されて。というのも、そういう学校の受験者はほとんどみんなオール５のような成績なんです。まあ、そういうシステムでやっているという学校もあるだろうし、塾ではそういうのをもっと細かいのを、独自でつくって分析していますからね。

Ｂさん　個人的な話で申し訳ないんですが、あり方を変えるのは大事なことですけど、必要な資料でもありますので。

川中子　まあ、必要に応じてこちらで用意することはできますので。

Ｂさん　そういうふうにしていただければ、困る人が少ないかなと。

川中子　通知表のことに関して言うと、区内にももう所見をやめてしまったという学校もあって。前期の所見はなし。数字しか入ってない。もうすでに始まっているんだな、と思いました。近いうちにどんどん進んでいくだろうなと。もちろん、そういうものに合わせて成績表を用意することもできるので、そういうことも考えていかないといけませんね。

Ｃさん　いろいろお話を聞かせていただいて、やっぱり、子供たちが自信を持てていないとか、リーダーシップをとりたがらない傾向があるということについては思っていたことがあって。主体性の教育で、どんどん自分を出していって、それが周りに影響をあたえていけたらすごくよい取組だなと感じています。それは大人にも通じるなって。職場でも何かを変えようとすると、いろいろ大変なことがたくさんありますが、先生たちもとても大変だと思いますが、よろしくお願いします。

川中子　ありがとうございます。

Ａさん　この「主体性の育成」が全部につながるんだなって。一つ一つ独立している課題ではなくて、全部つながっているんだなというのが今日わかって非常によかったなと思います。ありがとうございました。

家庭学習なんですけど、まあ、一律の宿題をなくすって言うのは、基本的には大賛成なんですが、その分家庭に任されるっていうことが多くなるかなと思うんですけど。最終的には子供が自分に必要なところを自分で判断してやっていくという理想を目指してやっていきたいと思うんですが、今、うちの子が３年生で、やっぱり自由がいいよってなると、本当に何か、絵を描いて終わりっていうか。もうちょっと何かできないかなって思うところがあるんですが、そういうときもどこまで親がかかわったらいいのか、って思うんですね。

Ｂさん　うちも学童で宿題をやってくるんですよ。ほぼ計算ばっかりなんですよ。どうしよう、って！

Ｃさん　うちの子も絵を描いちゃったりとか、同じような計算問題やったりとか。

Ｂさん　計算も重要なんでいいんですけど、もう少し何か、ねえ。

大人が試されている

川中子　多分ですね、そこが一番難しいところで、大人。親も先生も、自分のイメージの方に向かってやってほしいんですよね。だから、その声かけをしてしまうんですよね。その声かけをすると、子供はやる気がなくなる。ここでいかに（大人の方が）我慢ができるか。だんだん、子供たち同士でも何をやっているかがわかるようになって、「ああ、すごいね！」とかいいながら、自分もまねしてみようとなっていくわけです。最初からうまくできる子はいないんですね。少し時間がかかると思うけれど、それを大人がどこまでみまもっていけるか。それが鍵なんじゃないかな。例えば、「怒らないから言ってごらん」って言ったりするじゃないですか。子供は「怒らないから」っていうのでこうしたんだって言うじゃないですか。そうすると怒ったりして（笑）！そうすると子供は次から怒らないからって言われても言わなくなりますよね。**大人が子供に対してやってしまうことってそういうことで、子供の主体性を摘むようなことを、常にやり続けているんですよね。**日本の大人は特に。「人に迷惑をかけてはいけません！」とか。そういうことばっかり言ってしまう。でも、子供は本当はいいところもいっぱいある。そのいいところを伸ばしていくような声かけをしていくと、悪いところもなくなっちゃうんです。

さっきの大空小学校なんかは、暴れん坊の子供が、最初は周りの子を殴っちゃったりとかするんですが。あるとき、暴れん坊の子の気持ちを、周りの子が理解したらしいんです。「あの子だって、そんなことやりたくてやっているんじゃないんだよ。だから、先生は黙ってて！」算数の勉強やっていて、わからないとイライラして机をひっくり返したりする子。いるんですよ。この学校にだって何人もいます。そのときに、周りの子たちが「やばいぞ、そろそろ来るぞ！」っていって机をすーっとずらしたんです。そうしたら、それを見ていた木村先生が「あんたら、冷たいな！」って言ったんだそうです。そうしたら、「校

長はなんもわかってない」と子供たちが怒ったらしいんです。「ちがうの。この子は自分だってしたくないのになっちゃうの。だけど、それで周りの子がけがでもしてしまったら、この子がもっと傷つくことになっちゃうでしょう。だからよけているの。」そして、それはごめん、といって校長先生が反省（大空小では「やり直し」という）してきますと下がっていったそうです。それを聞いたその子は、周りの子が自分のことをそんな風に考えてくれていると知って、以後そういう行動がなくなっていったんです！それまで、先生たちがどれだけがんばっても、その子は直らないんですよ。変わらないんですよ。**でも子供の社会の中で、心が通じ合うと、がんばれるようになるんですよ。そこにヒントがある。自分で考えて、行動できるようになること。**先生が決めて「あなた、こうしてあげなさい」なんて言ってもだめなんですよ。

何か、こう、**ぐるってひっくり返る気がするんですよね。うまくいくと！**　その大空小学校なんかはその「ひっくり返った」学校なんだと思うんです。「奇跡の学校」って呼ばれているんですけど、奇跡でも何でもない。普通にやるべきことをやっただけ。そこまでやりきるのはかなり大変なことです。今、Ｃさんも言ってくださったように、改革は大変です。「主体性、主体性って、一体何すればいいんですか？」まあ「何すればいいんですか？」って言ってるあたりが主体的でないってことなんですが（笑）。イメージがわかないことに対しては、先生たちもどうしていいかわからずに不安になってしまうんですね。それを私もどう取り除くか。今それをやっているわけです。難しいですよね。私自身も実際、授業をやってみたいなあなんて思っているんですが。

Ｂさん　見てみたいなあ！

川中子　私は中学校の免許しか持っていないので、小学校では教えてはいけないことになっていますので。英語の授業しかできないんですが。

本当に今日は、皆さん来ていただいてありがとうございました。この取組はこうして、毎回土曜日来ていただいたときに、様子を見ていただいて、「あれ？変わってきたかな？」ってなっていけばいいし、もしかしたら全然変わらないじゃないかってこともあるかもしれませんが、ちょっと長い目で見ていただいて。変わっているクラスもあるので、ぜひいろんなクラスを見ていただいて。今日もどうもありがとうございました。